

「人間は社会的な動物である」という言葉があります。これは、古代ギリシャの哲学者アリストテレスの言葉であると言われていています。正確な意味は定かではありませんが、一般的には「人は個人として存在していても、決して一人で生活しているのではなく、必ず誰かとかかわりをもっている。つまり、人は社会の中で生活しており、社会とかかわりをもたずに存在することはできない」ということでしょう。

ところで、学校教育、または、学校の意義・目的について、文部科学省から次のような提言がなされています。「社会的自立に向けて、人間として、家族・社会の一員として、さらには国民として共通に身につけるべき基礎・基本を着実に学習・定着させること」「学校は子どもの社会的自立を促す場であり、社会性の育成を重視し、特に小学校段階においては社会生活に必要とされる読・書・算の基礎を確実に習得させることや基本的な生活習慣の形成・定着、広い心や自由・自律、公共の精神、社会性などの徳性と豊かな情操の涵養を図る場である」すなわち、学校は社会で生活していくために学ぶ場であり、練習する場であるわけです。子どもたちにとって、学校は他とかかわり合いながら生活する小さな社会と言えるかもしれません。

しかし、学校現場では、子どもたちの不登校が大きな問題となっています。さまざまな理由で学校とのかかわりを断ってしまう「学校に行かない子」や「学校に行けない子」が増えており、中には「学校が合わない子」もいるようにさえ感じます。安城市の小中学校においても、ここ数年は愛知県の不登校率を下回っているものの、年度を追うごとに不登校の子どもたちが増えており、とりわけ小学生の増加が懸念されています（図1・2）。

不登校の子どもたちの増加に伴い、本市適応指導教室に通室する子どもたちも増えており、令和2年度より2教室を増設して3教室で対応しています（表1）。また、小学生の増加とともに低年齢化も進んでいるため、学習時間（学習タイム）を1単位60分から40分に短縮し、さらに、落ち着いて学習できない低学年の子どもには、保

図1：不登校の推移（小学校）

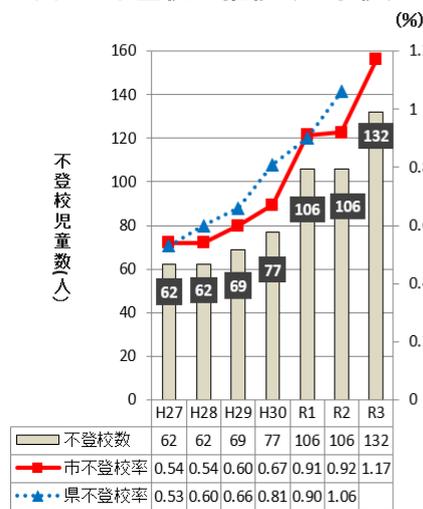


図2：不登校の推移（中学校）

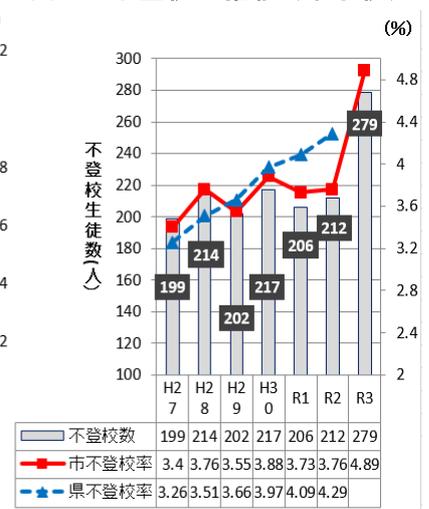


表1：適応指導教室通室者数

	小学生	中学生	合計
平成30年度	12	41	53
令和元年度	23	35	58
令和2年度	35	34	69
令和3年度	52	38	90
令和4年度	30	30	60※

※5月末現在、令和3年度40人

護者の付き添いを依頼したり、自由時間（フリータイム）のみの通室を勧めたりしています（図3）。

通室当初、子どもたちの表情は暗く言葉数も少なく、積極的に他とかかわろうとする姿は見られません。しかし、幅広い年齢層の子どもたちと一緒に学んだり、遊んだりする中で、表情が明るくなり、笑顔で他とかかわり合う姿が見られるようになります。適応指導教室が、不登校の子どもたちにとって、元気を取り戻す「心の居場所」となっていることに間違いはありません。

しかし、適応指導教室に通室することはメリットだけでなく、デメリットもあります。それは通室が長期化すればするほど、学校に登校している子どもたちとの学力差がますます開き、中学卒業後の進路選択の幅が狭まってしまうことです。5年ほど前まで本市適応指導教室に通室していたのは、中学生ばかりでした。学校に登校できないことに苦しみ、中学卒業後の進路に不安を抱きながらも、希望する進路の実現に向けて落ち着いた雰囲気の中で学習に取り組んでいました。幸いなことに読・書・算の基礎ができていたこともあり、多くの子どもたちが上級学校へと進学していきました。ところが、小学生が増え、低年齢化が進むにつれ、読・書・算の基礎が身につけていない、九九さえおぼつかない子どもたちが通室するようになりました。また、未熟さや発達障害なども相まって、他との関係を上手く築くことができず、時折トラブルも見られるようになりました。本市適応指導教室では、ボランティアを増員し個別に対応するとともに、タブレットを活用した学習支援にも取り組んでいます。ただ目の前の子どもたちが、中学卒業時に希望する進路に進むことができるのか、一抹の不安を感じています。

さて、本市適応指導教室に通室する小学生については、次のような傾向が見られることがわかりました。「5・6年生で不登校となったケースでは、中学進学時に一旦は復帰・登校するものの、再び不登校となる可能性が高いこと」「1・2年生で不登校となったケースでは、半年から単年度で再登校できる可能性が高いこと」これらについては今後も検証していきたいと思えます。

子どもたちの誰もが、いつかは社会の一員として、自立して生きていかななくてはなりません。けれども、何らかの理由で不登校になってしまった時には、適応指導教室が学校に代わる受け皿として、また、子どもたちの居場所として、彼らの成長を後押しする場であり続けたいと考えています。いっばう、子どもたちが不登校になってからではなく、ならないような取り組みや支援を今以上に学校や保護者に期待したいものです。

図3：日課表

時間	内容
9:00	モーニングタイム ★学習の準備をします。
9:30	学習タイム1 ★各自、教科の学習を進めます。
10:10	休憩
10:20	学習タイム2 ★各自、教科の学習を進めます。
11:00	フリータイム ★自分のやりたいことに取り組みます。(絵画、音楽、運動など)
12:00	ランチタイム(弁当)
13:00	学習タイム3 ★各自、教科の学習を進めます。
13:40	フリータイム
15:00	整理整頓・帰宅